

今日の説教のポイント <マタイによる福音書5章27~32節>

初めてここを読んだ人は誰でも驚き、そして「自分にはこの信仰は無理だ」と思いかねない箇所。ここから何を聞き取るべきか。

- ①「あなたがたも聞いており、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその妻を犯したのである。」(27~28)

性的な関心について非常に厳しい、実行不可能に思えるこの主イエスの要求を読んで、最初は強く心動かされ、しかし最後には「自分にはできない」と思ってキリスト教から立ち去った明治の文豪たちは少なくありません。彼らがここを読んだ時には、人間が性的欲求を持つこと自体に関心の目が注がれていました、それは不潔だと思う方向で。しかし、そのような読み方は正しいでしょうか？ 主イエスの関心はそこにあつたのでしょうか？

まず目を留めなければならないのは、27~32節で主イエスが述べられている性的問題は「結婚した男女の関係」に集中しているという点です。ただ性的なこと、人間が性的な関心を持つということを問題にしているのではありません。性的な目で異性を見つめること自体を人間の罪として強く考え出したのは、特に4世紀から5世紀にかけて生きた大教父アウグスチヌスの影響があると言われています。しかし、聖書のこの箇所(27~32節全体!)に目を戻すとき、主イエスは、「結婚は姦淫によって破壊される」ということを強く叫んでおられることが分かるはずです。

- ②「しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。」(32)

旧約聖書では、真の神様を知らされたイスラエルの人々が背信して他の神を慕うことに対して、神様は「姦淫の罪を犯している」と強く非難されています。姦淫の一番の問題性は何でしょうか？ それは、神と人にせよ、人と人にせよ、互いに信頼を寄せ合って歩んで行くはずの両者の信頼を破たんさせるという問題です。先に「結婚は姦淫によって破壊される」と述べたのはそのことです。

異性に性的な関心を持つということ自体が罪である、というような方向に考えるべきではありません。それでは、生殖行為自体がそもそも罪であることになり、そのようなこと自体の中に人間の罪を見る神学を考えるようなおかしな信仰理解に向かいます。実際、そのような理解が先に紹介したアウグスチヌスをはじめ、キリスト教の歴史の中に流れ続けて来ました。しかし、私たちは、主に祝福された結婚は恵みであり、その恵みの実として子どもが与えられ、実際、そのことを二人で心から喜び合い、神様に感謝できる、男女の性的な交わりが神様から与えられていることを覚えられる信仰を身につけたいと思います。性的な行為自体が不潔と考えて悩むような信仰からは解放されなければなりません。しかし、同時に、本当に結婚した相手への誠実を貫く信仰を身につけなければなりません。姦淫は、互いに愛し合い、信頼し合い、そこに与えられる喜びを破壊してしまう罪だからです。